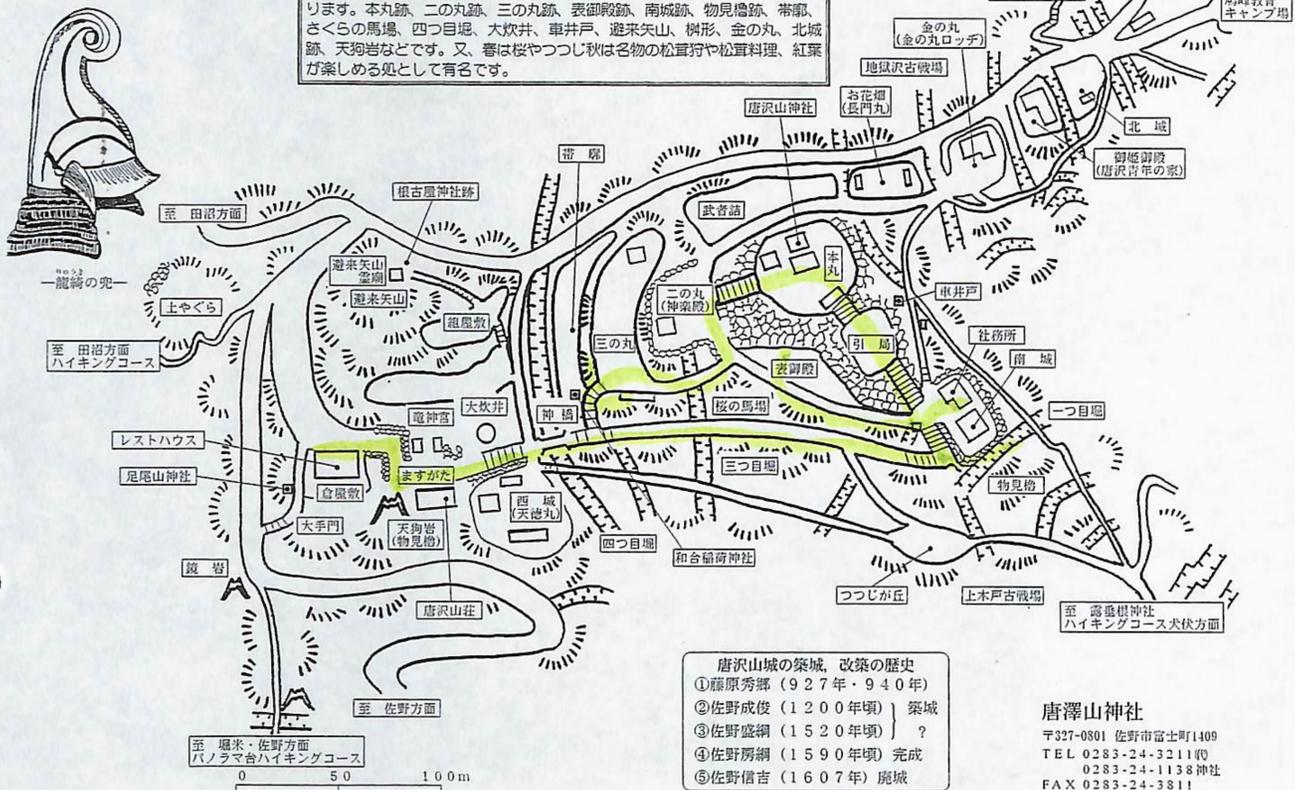




唐沢山城跡案内図

唐沢山は、今から1000年余の昔「おむかで退治」の伝説や天慶の乱で平将門を滅ぼした藤原秀郷公の居城跡で、標高240mながら全山赤松に覆われた断崖と深い谷に囲まれた天然の要害をなし、今も当時をしのぶ遺跡が数多くあります。本丸跡、二の丸跡、三の丸跡、表御殿跡、南城跡、物見櫓跡、帯郭、さくらの馬場、四つ目堀、大炊井、車井戸、避来矢山、樹形、金の丸、北城跡、天狗岩などです。又、春は桜やつつじ秋は名物の松茸狩りや松茸料理、紅葉が楽しめる処として有名です。



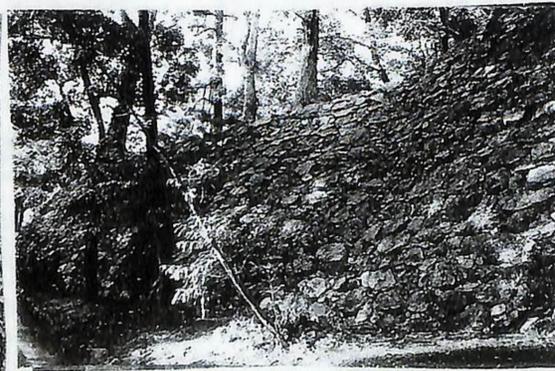
唐沢山城の築城、改築の歴史  
①藤原秀郷(927年・940年)  
②佐野成俊(1200年頃) 築城  
③佐野盛綱(1520年頃) ?  
④佐野房綱(1590年頃) 完成  
⑤佐野信吉(1607年) 廃城

唐沢山神社  
〒327-0801 佐野市富士町1400  
TEL 0283-24-3211(特)  
0283-24-1138(神社)  
FAX 0283-24-3811

史跡「唐沢山城」沿革史跡看板

唐沢山城は佐野市の北、高さ240mの山体をいい、往時の広さ550町歩といわれ、周囲を急崖に囲まれ関東平野を一望に遠く北より日光連山、西に群馬連山、秩父南アルプスとまことに天然の要害である。当社御祭神秀郷公により1000年前の延長年間築城とされ、公はこの城を中心に天慶の乱を鎮定し、大功を立てられ、その功により鎮守府将軍として関東はもとより奥州方面まで威勢を張られた。その後700年多少の変遷はあったが公の子孫佐野家代々の居城として16世紀中ごろに現在の形をととのえたとされている。関東7名城のひとつに数えられ、中世の山城の典型として旧態をよく今に残し、代々の変遷の跡もみられ、近世初期にまで下る整備の跡もうかがわれる。江戸初期、山城禁止令により佐野市の山公園の地に城換えとなって唐沢山城の歴史が終わるが明治になり、唐沢山神社が建てられると全山境内となり県立自然公園に指定され、四季折々の風景の中に秀郷公以来の歴史が偲ばれる。

ムカデ退治する藤原秀郷



関東めざらい本丸高石垣

4 関東には少ない石造りの堅城、「唐沢山城」を歩く

1) 藤原秀郷築城、江戸を俯瞰した山城 — 唐沢山城の歩み

- ①平安時代、藤原秀郷築城とされる。
  - ②治承4年(1180)藤原氏の流れをくむ佐野成俊が廃城となっていた唐沢山城を再興、以後佐野氏居城となる。戦国時代小田原北条氏と越後上杉氏の境目となった下野は戦乱に巻き込まれ、攻められて都度上杉、北条氏の両軍に組み入れられた。後期は北条氏から養子を迎えて定着した。
  - ③天正18年豊臣秀吉の小田原征伐後、北条氏からの婿取りに反対して秀吉に仕えていた房綱が佐野氏を継ぐ。秀吉は徳川家康の北方牽制のため腹心の富田信吉を養子として送り込み、一転して豊臣系大名となる。しかし関が原合戦に勝利した家康にとっては煙たい。信吉の居城を春日岡(後の佐野城)へ移させ、大久保忠隣、兄富田信高事件に連座改易となった。
- \* 改易の原因に、慶長7年の江戸大火を望見して江戸城に駆けつけた「江戸俯瞰」説がある

2) 関東では珍しい石垣の山城、天然の要害

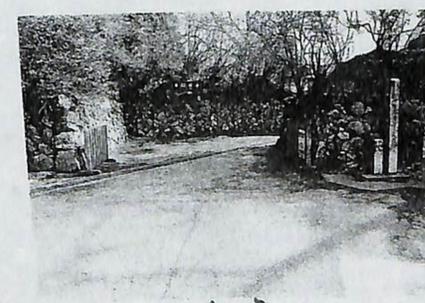
- ①全山赤松に覆われ、断崖と深い谷に囲まれた天然の要害。縄張りには北条支城時代に形成されたものであろうか。輪郭式山城。別名を根古屋城、栃本城、牛が城ともいう。中世山城の雰囲気色が濃く残る。
- ②本丸周辺に見事な高石垣が連なる。山石の粗割り石を利用、長辺を横積み、コーナー部は未発達、発展途上の算木組が見られ、織豊石積み技術の影響を受けたことが判る。信吉時代に構築、または大幅に改修されたと見られる。
- ③石垣以外の城遺構は土塁、空堀、堀切、物見、井戸跡など。全般に良く整備されている。
- ④現状は県立自然公園の一部、城域一帯は唐沢山神社で藤原秀郷を祀っている。

3) 天狗岩の景観 — 大手門から外郭部分、堀切まで

- ①直下に大手門跡、時間あれば帰りに有志で下りる。
  - ②駐車場、レストハウス=元蔵屋敷跡という。
  - ③天狗岩(物見櫓跡)=升形虎口横の天然の奇岩、物見跡、天狗の鼻のようにみえることから。危険なため足腰自信の人だけ。断崖上に立地、圧倒する景観。好天なら新宿高層ビルや富士山が望める。
  - ④避来矢山(根古屋神社)=組屋敷跡、天狗岩とともに主郭を守る高台で横矢となる。
  - ⑤城名碑、県立自然公園碑
  - ⑥升形虎口=城門食い違い跡、石材や石組みに不自然さあり、明治以降、昭和?の後補か。
  - ⑦大炊の井=築城のとき蔵島大明神のお告げで掘ったところ水が吹き出したとされる。水の手。
  - ⑧神橋=元は「曳き橋」「吊り橋?で架撤自在のものとなり」、普段は引き上げる曳き橋か。
  - ⑨四つ目堀(堀切)=主郭である3の丸と外郭を区切る城内最大の堀切、もっと深く6-7m?、北側先に続き土塁、帯郭を付属している。
- \* 空堀は平面を掘り、堀切は山を掘り切る。唐沢山城では東面(見学しない)に多用されている



↑天狗岩 ↓上から景観



升形虎口



大炊の井



神橋



4) 粗割り石横積みの石垣 —— 南城と本丸石垣

- ①三つ目堀=豎堀?土橋?
- ②桜の馬場跡=城主や城兵の馬術訓練所。周辺に桜が残る。
- ③南城高石垣=石も大きく見ごたえがある。コーナーの算木組に注目したい。石垣下は一つ目堀(堀切)、物見櫓跡になっている。
- ④南城跡(社務所)=南城は南面高台に立地、絶好のロケーション、しばらく絶景を楽しむ。社務所は明治27年当時皇太子だった大正天皇の行敬時に休憩所とされた。帯郭か、車井戸を遠望、進むと長門丸、金の丸へ出る。尾根と堀切が続くが今回は省略する。
- ⑤表御殿跡=政務庁舎?(どの程度の建物かは不詳)
- ⑥本丸高石垣=表御殿跡から見上げる。当時の姿を止める。地山の産石を利用、粗割り石野面積み(粗割り石積み)横積み、慶長はじめ佐野信吉が構築、織豊系石垣の影響を受けている。  
\*割り石と切り石、工法と外観の違いを確認  
\*関東における織豊時代石垣の代表例といえる

5) 築城者の藤原秀郷を祀る唐沢山神社 —— 本丸跡

- ①引き局跡=奥女中詰め所という。現在は神社の表参道で鳥居や石灯籠が立ち並ぶ。
- ②本丸跡(唐沢山神社)=本丸御殿跡、枯れ山水庭園? 未発掘のため不詳。唐沢山神社は明治16年創建、祭神は伝唐沢山城築城者の藤原秀郷を祀る。
- ③周囲に石垣が回る。搦手口は神社通用門として改変が著しく正しく当時を伝えていない。

6) 2の丸、3の丸経由して元の駐車場へ

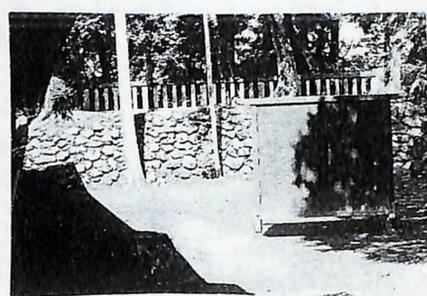
- ①2の丸跡=石垣に囲まれた一画、奥御殿直番詰め所という。石積みは良好で積み直しも多い。右に迂回すると武者詰め(武者溜まり)に出る。長門丸、南城と合わせて2の丸と考えるべきだろうか。
- ②3の丸跡=現在は広場、土の城で土塁を回す。
- ③レストハウス前に戻りバスへ乗車。
- ④下山の途中、鏡岩前を通過。上杉謙信が攻めたとき西日に反射して軍兵の目を眩ませたという。



本丸石垣



周回石垣



2の丸



石垣と竹取跡



神楽殿跡の石垣



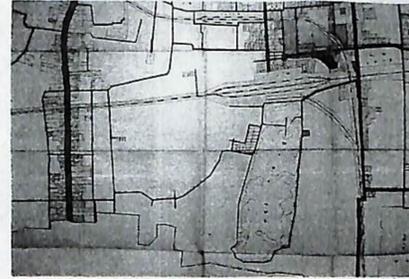
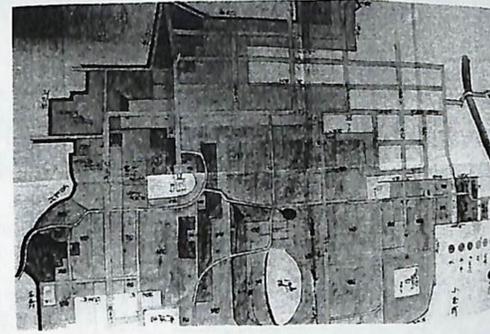
唐沢山神社本殿



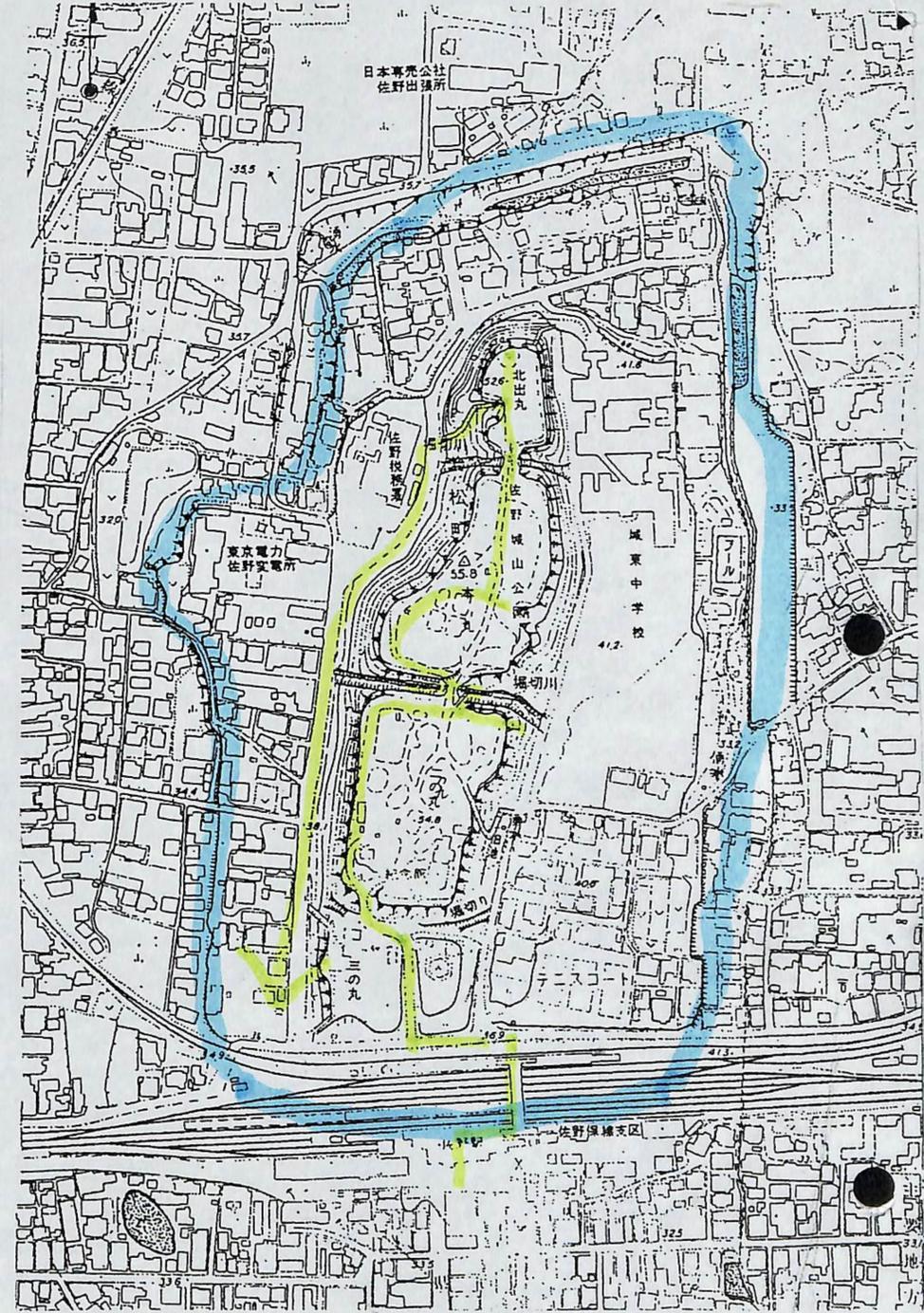
3の丸



土手石垣



江戸時代の町並



佐野信吉(その)のぶよし・一五六六(一六二二) 下野野澤三万九千石佐野家当主。永禄九年伊勢国津において豊臣秀吉の御家人富田左近将監知信の五男に生まれる。母は黒田監物久綱の女。幼名小吉郎、のち信種、政綱。天正七年より秀吉に仕え、同二十年九月佐野房綱(天徳寺了伯)の養子となり、その養女(十八代城主宗綱の女)を室として佐野家を継ぎ、第二十六代唐沢山城主となる。所領三万九千石を領し、うち六千五百石は養父房綱の隠居料にあてる。この年従五位下、修理大夫に叙任し、佐野信吉と改む。文禄元年九

月二十二日秀吉より所領安堵の朱印を与えらる。同二年五月十日家臣高瀬遠江・福地帯刀・大貫大和・高山外記・浅野孫十郎の五人の者へ先規の通り奉行を申しつける。慶長五年上杉景勝が会津の封国にあって謀反の企てたため、六月十九日秀忠の命により封地佐野を守備し、七月家康が小山に着陣のとき、東国の諸將と同じく結城秀康に従い、上杉景勝の押えとして佐野の居城を誓固する。同六年七月二日養父房綱没す。同七年二月仰せよって唐沢城を廃し、同年九月十五日平城を築き春日岡に移り住む。同八年二月天命(寛永以後天明)の町割を行ない、これより城下町として栄える。同十年二月二十四日秀忠江戶発足、三月二十一日入洛のとき恩従す。同十九年七月二十八日(駿府記) 兄伊予守和島藩十万石富田信濃守信高の事に連座して御勘気を蒙り所領を没収され、小田原の小笠原兵部大輔秀政に預けられ、信州松本に墜居させられる。この事情を『廢絶録』慶長十九年三月朔日条下に「修理大夫事、内々不義連続せしむるところ御札明あつて仰付けらるるべしと思召し、御延引候へども、当年在国せしめ、江戸の火事に山上より見候て早馬にて馳せ来る。在国の衆、御意を得ず参府曲事第一也、修理大夫の城破却、その身は江戸にあらしむべし由、秀忠様より仰せつけらる」とある。また七月二十八日の条に「修理大夫御改易、信州松本へ御預け家康様より仰せ出され候間、晦日江戸へ注進、これ、さきの罪科重く、その身不届少なからず、これあるについて終にかくのごとし」とある。これより家康・秀忠の書状数通たまわる。元和八年二月十九日赦免されて江戸へ移るも、病を得て七月十五日逝去す。年五十七。法名源心。橋場の総泉寺に葬る。

①永禄九年 ②富田知信、養父佐野房綱 ③黒田久綱の女 ④小吉郎、信種、政綱 ⑤佐野房綱の養女(佐野宗綱の女) ⑥五男一女 ⑦従五位下、修理大夫 ⑧元和八年七月一日五七歳 ⑨東京都板橋区小豆沢・総泉寺 ⑩寛政重修諸家譜『廢絶録』佐野市史『栃木県百科事典』



佐野城

佐野市指定史跡、名勝「佐野城跡」市史跡看板

佐野城は別名春日岡城ともいわれ、その地名は延暦元年藤原藤成がこの丘に春日明神を祭ったことに由来すると伝えられています。慶長7年唐澤山城城主信吉は当時この地にあった惣宗寺(佐野薬師)を移転させるとともに築城と町割りを開始しました。今日みられる佐野の街は当時の佐野城を中心とした町づくりがその原型になっています。佐野氏は慶長12年唐沢山城を廃してこの地へ移りましたが、同19年所領を没収されて改易となり、築城間もなく城は廃城となつてしまいました。

建物跡、石組溝、井戸、外堀、石畳、虎口、水堀、性格不明施設跡、切り岸と内堀

本丸の中央部からは建物群が発見され、柱を支える礎石が整然と等間隔で並べられていました。建物は南北4間、東西6間以上の規模で本丸野主殿に関わる施設であったと考えられます。この付近からは桐紋の棟込み瓦がいくつも出土しており、当時佐野家は豊臣家と深いつながりであったことがうかがえます。

石組み溝

2の丸の北部からは東西、南北に走る石組み溝が発見され、南北溝の一部はクランク状に折れ曲がっていました。本丸同様、2の丸にもすでに排水施設が整備されていたことがうかがえます。

井戸

3の丸の南部では地表下1.5mの深さから石組みの井戸跡が発見されました。井戸は内径1mですが、保存のため完掘せずに埋め戻したため、深さや底の状況は不明です。城の馬出し部に巡ると思われる幅10mの堀跡が確認されました。

外堀

発掘調査の結果、築城開始から廃城までわずか12年の間ながら、近世城郭としての機能はすでに完成されていたものと考えられます。外堀は東西300m、南北600m四方の城郭を取り囲み、幅も広い所では数10mに達していました。

石畳

本丸の東部からは地表下1.5mほどの地点から両側に石畳が築かれた通路が発見されています。その通路には石畳が丁寧に敷き詰められ、本丸の主殿への階段が続いていました。なお石畳には側溝が伴っており、排水施設と考えられます。

虎口

本丸の南部からは石垣で築かれた桁形状の虎口が発見されました。この場所は2の丸から橋を渡って本丸に入る出入り口にあたります。当時、廃城の際は城が再び使用されないよう、建物や石垣などはことごとく壊されてしまいましたが、発掘調査によってその破却の様子もわかりました。

水堀

内堀と外堀の間に東西に延びる小規模な堀が発見されました。最大で幅2.9m、深さ2.2m、長さは25m以上に及びます。断面形はV字状でいわゆる粟研堀といわれる形をしていました。堀の南壁面には、柱穴が3つ1間隔に並んでおり、中からは柱の一部が腐らずに出土しました。

性格不明施設跡

道を挟んだ一部に排水施設を伴った大型の遺構が見つかりました。この施設跡は東西15m、南北10mにも及び、周辺に周辺に水抜き溝をめぐらし、地表面を大きく凹地状に掘り込んでいました。中からは長軸にそってその中央部に上面がま平な1mもある大型石が3m間隔で2つ並んで出土しました。

切り岸と内堀

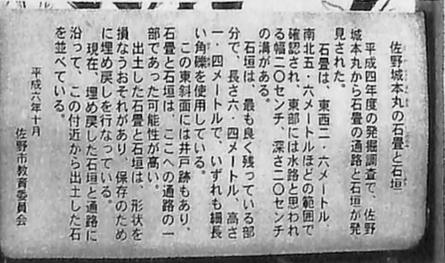
3の丸南東部からは佐野城の硬い地山を削り取って、石垣に変わる急斜な崖とその上部に平坦な面を造り出した切り岸が確認されました。またその南側には内堀が切り岸にそって東西方向に発見されました。堀底から切り岸上面までの高さは4mあり、その上に4mの盛土を行なって佐野城を築き上げていたことがわかりました。

佐野城本丸の石畳と石垣市教育委員会史跡看板

平成4年度の発掘調査で佐野城本丸から石畳の通路と石垣が発見された。石畳は東西2.6m、南北6mほどの範囲で確認され(中略)石垣は最もよく残っている部分で長さ6.4m、高さ1.4m、いずれもいずれも細長い石礫を使用している。この東斜面に井戸跡もあり、ここへの通路であった可能性が高い。(中略)保存のため埋め戻しをおこなっている。

「北出丸」市史跡碑

この場所は北出丸あるいは北の丸といわれ、本丸の北側を守る場所である。東西36m、南北54m本丸との間の堀幅14mと記されているが、建造物などの詳細は不明であった。平成元年に一部発掘調査が行なわれテラスが建設された場所には岩盤をくり抜いた柱穴遺構が発見され、多量の瓦も出土し、隅櫓跡とも考えられる。また西側の階段周辺には搦め手があったと考えられ、防御の点からも複雑な地形を構成しており、重要な場所であったことが確認された。



戦国最強武将「上杉謙信」

戦国最強の武将は誰か? これまで多くの歴史家が議論してきたが、上杉謙信と武田信玄の両雄が飛び抜けて強かったのではないかとほぼ結論づけられている。織田信長も豊臣秀吉も徳川家康も、実力面ではこの2人に到底かなわなかった。事実、信長は謙信に加賀(現・石川県南部)の手取川において完敗している。鉄砲、弓、馬上といった軍事編成を比較すると、どの軍勢も基本的に違いはなく、また戦術的にもさしたる差異はない。それどころか、軍勢力を量る面から見ると、上杉勢は他の勢力を下回っていたのだ。にもかかわらず謙信の主な戦いにおける戦績は、後で敵に拠点を奪回されたことはあるものの、直接の戦闘においては生涯無敗を誇っている。つまり、戦国最強の武将は謙信だったということができるのではないだろうか。



上杉謙信画像。小刀を差し、長刀を脇に持つ姿は武將だが、黒い頭巾に法衣、袈裟という装いは立派な僧形である。(上杉神社蔵)



「刀八(とばつ)毘沙門」と書かれた謙信の旗。謙信は、北方の守護神である毘沙門天を、北国越後の守護神として篤く信仰した。(林泉寺蔵)

来年4月「一泊旅行」=越後春日山、高田城キャンペーン(第1回)



●監物堀と土塁 平成8年に、山麓を巡る総構である監物堀の堀や土塁の一部と番小屋などが復元された。なお、1.5kmに及び監物堀すべてを復元整備する壮大な計画もある。



●春日山城を望む 写真中央奥の山が本丸と井戸曲輪、毘沙門堂などの中核部の曲輪群が置かれていた「御美城」である。



初期の築城者は不明だが、戦国時代に越後守護代長尾為景とその子長尾景虎(上杉謙信)らが本格的に城を整備強化、戦国時代有数の難攻不落の城となつていった。城のある春日山の地名は奈良の春日神社に由来すると

いわれる。石垣は用いられず、土塁や空堀で築かれ、山全体に多くの曲輪や屋敷を巧みに配置した巨大な山城であった。平成8年に土塁や水堀が整備され、中世巨大山城の姿がよみがえりつつある。



●春日山山頂の「天守閣跡」(伝天守台) 春日山の最高部に位置し、他の場所よりも一段高くなっている。

主な遺構と見どころ ●本丸・井戸曲輪・二の丸・三の丸・毘沙門堂・景勝屋敷・直江屋敷などの曲輪、土塁、空堀、総構 ●約1.5kmにも及び監物堀と呼ばれる長大な堀と土塁の総構の一部が今でも残る。春日山城史跡広場に復元された土塁や水堀から中世の壮大な山城の姿が想像できる

Table with 2 columns: 別名, 所在地, 連絡先電話, 城地種類, 築城年代, 築城者, 主要城主, 文化財区分, 近年の主な復元・整備, 天守の現況・形態, 主な関連施設, 追記

春日山城

上杉謙信が居城とした戦国の巨大山城

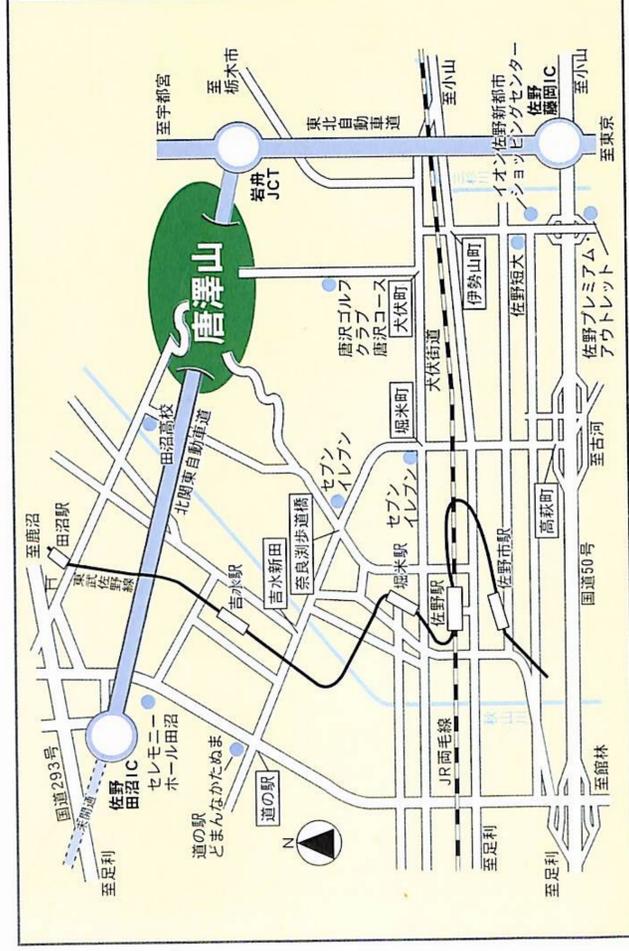
交通

JR北陸本線「直江津」駅から ●バス「春日山荘前経由中央病院行き」で約20分「春日山下」下車、本丸まで徒歩約1時間 JR信越本線「春日山」駅から ●本丸まで徒歩約1時間30分

## 古跡・旧跡案内

唐澤山神社に藤原秀郷公が祀っており、こけむす石垣は当時のままである。  
 奥御殿直書の話所のあったところである。  
 賓客の応接間のあったところで、外来の客をここでもてなした。  
 日々の事務、指揮採配をとった正庁のあったところ。  
 南城のあったところで、現在の建物は東明会の寄進による。明治27年大正天皇（皇太子の時）行啓の榮によくした。  
 南城下の台地で当時物見台があり、入り組んだ谷間も良く見えるようになっていた。  
 敵を防いだ当時最大の防禦地であった。  
 武士が馬を訓練したところで、さくらがらが多いのでこの名がある。  
 神橋の下の堀をいう。水のない（から堀）で当時はもって深かったと思われる。なお神橋も当時は外敵にぞなえ使わない時は引きあげてしまいう曳橋であった。  
 築城のさい、敵島大明神に祈願をし、その靈夢により掘ると水がこんこんとわき出たとの事である。深さ9米、直径8米あり、今日まで水がかれたことはない。  
 公が百足を退治した時、龍神より贈られた鏡にその名を発しており、現在は唐澤山神社に功績のあった人々を祀る避来矢山霊廟が山頂にある。  
 城門のあったところで、くいちがいがいともいわれる。  
 当時金藏のあったところで、現在は金の丸ロジとして唐沢子供会の教育の場となっている。  
 当時姫御殿のあったところである。  
 物見櫓のあったところで、南面に出た岩がちょうど天狗の鼻の様であったためこの名がある。

- 本丸跡
- 二の丸跡
- 三の丸跡
- 表御殿跡
- 南城跡
- 物見櫓跡
- 帯廓
- さくらの馬場
- 四つ目堀
- 大炊井
- 車井戸
- 避来矢山
- ます形
- 金の丸
- 北城跡
- 天狗岩



佐野藤岡ICより 20分  
 佐野田沼ICより 10分  
 各種ハイキングコース有り  
 (1時間～半日コース)

### 唐澤山神社

〒827-0801 佐野市富士町1409  
 TEL 0283-24-1138  
 FAX 0283-24-3811

### 唐澤山荘

TEL 0283-24-3211  
 FAX 0283-24-3811

### レストハウス

TEL 0283-23-1939

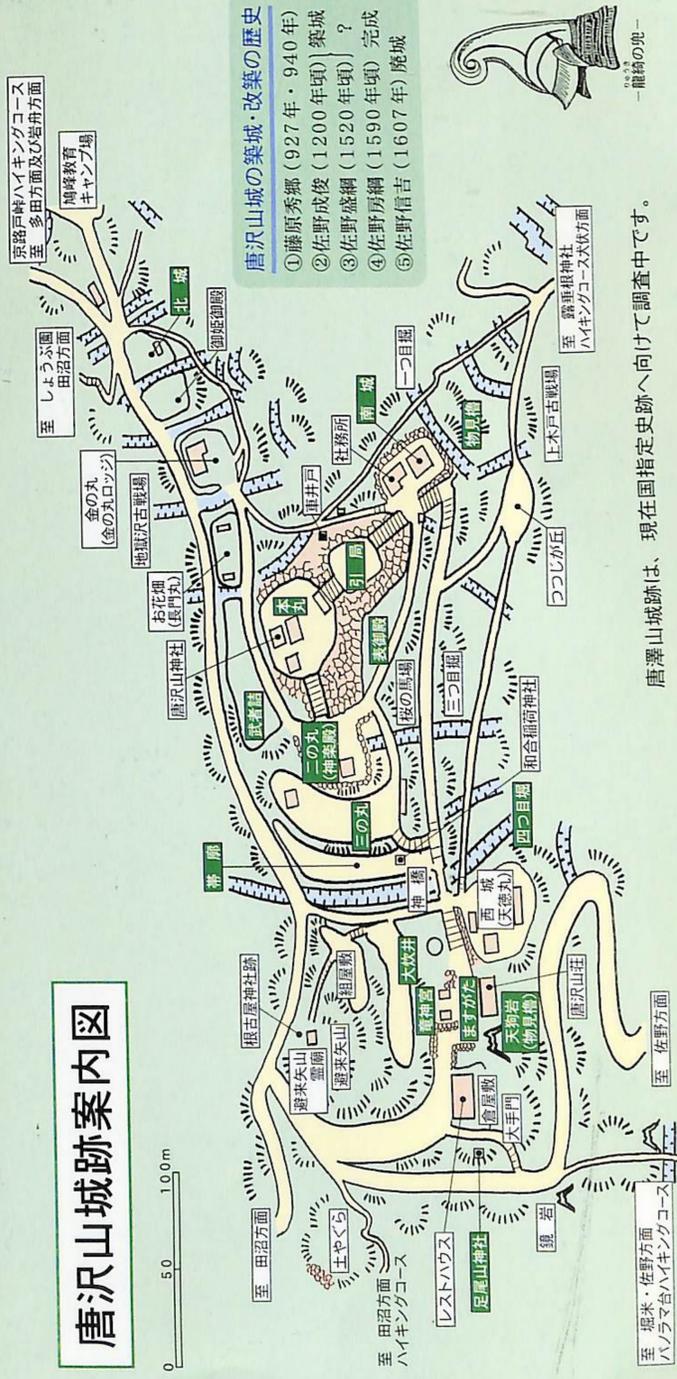
<http://www.karasawayama.com>

# 唐澤山 千年の古城跡

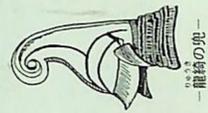


## 唐澤山城跡案内図

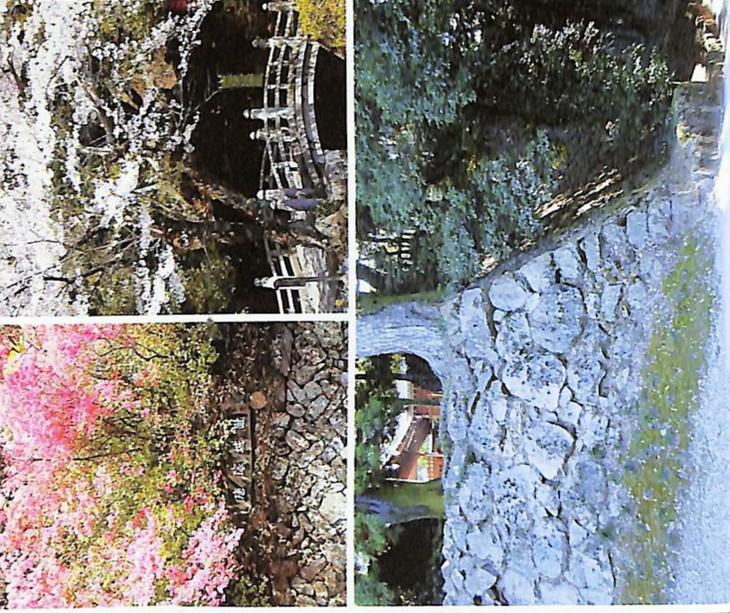
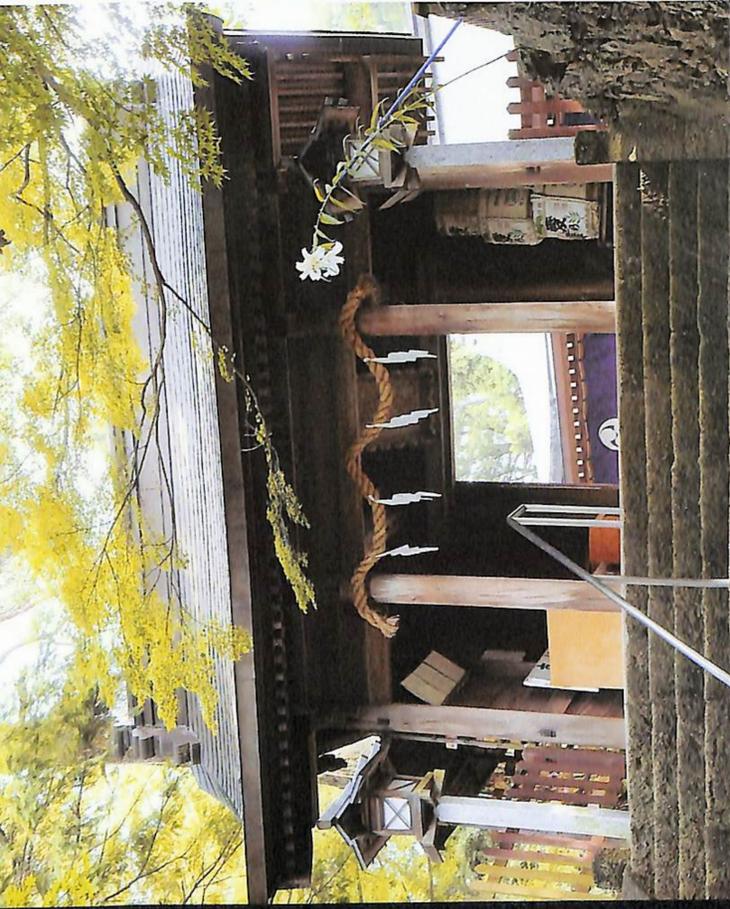
0 50 100m



**唐澤山城の築城・改築の歴史**  
 ①藤原秀郷(927年・940年)  
 ②佐野成俊(1200年頃)|築城  
 ③佐野盛綱(1520年頃)?  
 ④佐野房綱(1590年頃)完成  
 ⑤佐野信吉(1607年)廃城



唐澤山城跡は、現在国指定史跡へ向けて調査中です。



## 「沿革」

唐澤山は今より一千年の昔「むかで退治」の伝説や天慶の乱で平将門を滅ぼした藤原秀郷公の居城跡で標高240米ながら全山赤松におおわれ断崖と深い谷に囲まれた自然の要塞をなし、今なお当時をしのぶ遺跡が数多くあります。唐澤山神社の御祭神藤原秀郷公は幼時京都の近郊田原の郷に住んでいたもので世に田原（伊）藤太秀郷ともいわれています。公在世当時（平安朝の中頃）は都の朝廷では藤原氏が代々摂政や関白になって政治の実権をにぎっていましたが一族の間で政権争いがくりかえされ、そのために都の政治が乱れてくると地方の政治もゆるみ土着の豪族などが欲しいままに勢力をふるってくるようになり、時に公は延長五年（927年）に下野国（栃木県）の警察にあたる押領使という役に任ぜられ父祖伝来の此の地に参られ唐澤山に城を築いて善政を施していた。たまたまこの頃桓武天皇の流れをくむ平将門は父の残した領地のことから叔父の国香を殺し、しだいに勢力を増し天慶二年（939年）頃から関東八ヶ国（上総、常陸、上野、下野、武蔵、相模、伊豆）の国府を順次攻めたて国府の長官を京に護送して関東地方の大部分を支配してしまい、自ら親皇と称し、朝廷の命令を聞こうとせず、このように将門が地方で乱暴を働くのをみかねた朝廷では藤原忠文に征東大將軍の職を与え将門征伐に出発させ、その軍が到着する前に秀郷公は平貞盛と力を合せて、将門の軍を下総国幸島において攻めほろぼし、時に天慶三年二月十四日世にこれを天慶の乱と言います。公はこの功績により押領使から下野守（栃木県の長官）になり、さらに武蔵守の役も兼任するようになり従四位下へと進み、その手柄に対し朝廷より土地一功田が与えられました。その後代々子孫が城主となり、約700年間、佐野修理大夫信吉公の代まで続き、徳川幕府の初期、現在の城山公園の地に城を移し春日城とよばれました。この春日城がまだ完成しない1613年（慶長十八年）大名としての佐野家は徳川氏の政策より断絶、城主佐野信吉は信州松本城にお預けとなりましたが、23年の後時の三代将軍家光から赦免の恩命に浴し、信吉の二人の子供は旗本として佐野家を再興することができました。1867年（慶応三年）廃藩置県により土族となり明治を迎え、ここに至り一族、旧臣、相謀って沢英社と東明会を組織して秀郷公の遺徳をしのび明治十六年九月二十五日本丸跡に神社を創建して同年十月二十五日に秀郷公の御霊を奉斎し、以後永くこの地方の守護神として尊崇されております。



## 「伝説」

蛭蚣退治 秀郷公は幼時、京都近郊田原の里に住んでおられました。元服（ういこうぶり）といって今の成人式にあたるが20才前に行うことが普通であった。の時、御父村雄公より三尺余りの立派な太刀を一本振り賜わり益々文武の道に励むようにとされました。間もなくして、朝廷の命により下野国の押領使として関東に下る時、近江国瀬多の唐橋にさしかかったところ身のたけ60米もある大蛇が横になっていて、人々が大変こまっています。しかし公は唯一一人この背中を悠々と渡りました。その夜半宿に、この世のものとは思われぬ程美しい女性が公をたずねて参りました。その女性が「私は琵琶湖に住む龍女です。毎年、私は子を産みますが一人として満足に育ったものがおり



ません。それというのも琵琶湖のほとりの三上山に住みついで、善良な人々を苦しめている大蜈蚣のせいでありです。毎年、子供が生費になるので育てられないのです。そこで、之を退治する武將をさがすために大蛇に変化しておりました。あなた様は日本一の武人と誉の高いお方です。どうか、乱暴な大蜈蚣を退治していただきたくお願いに参りました。秀郷公は武勇に勝れいづくしみ深いお方でありますので、この願いを快く引受けて蜈蚣退治に出かけることになりました。公は父より頂いた刀と五人張りの重藤の弓と大矢三本を持ち、さきの女性を道案内に勇ましく三上山へ向かわれました。山も興を極めんとするあたりまでくると、にわかに明るくなりました。見るとそこには、大蜈蚣がランランと目に光らせ、電光を放ち嵐のような風雨を吹かせてあれるつていました。すかさず公は、重藤の弓に矢をくがえてぎりぎりとも弦を絞ると狙いを定めてパッと矢を放ちました。一本目二本目とも蜈蚣に当たってもはじき返されてしまい、残る一本の矢の先端に唾をつけて天地神明に祈り射ったところ見事蜈蚣に突きささり、二度三度大きないかつい体を震わしたかと思うと息が途絶えてしまいました。するとさきほどまでの嵐も天地雷鳴ともに治まり平和になりました。この御礼として龍神より黄金作りの大刀と鎧、使っても尽きない巻絹と米俵、そして大きな釣鐘を戴きました。鎧は避来矢の鎧と称し当神社に、大刀は伊勢神宮に、大釣鐘は三井寺にそれぞれ伝えられています。

（三井寺物語より）

